

●水環境・生物(2) (2-D-10-4~2-D-12-1)

このセッションは「水環境・生物(2)」で、会場で立ち見が出るほど参加者が多く盛況であった。内容は、統計的検討による水質の水性生態系への影響(2-D-10-4)、生物指標と水質特性の関連を明らかにするための水質と水生生物相との関係(2-D-11-1)、沈水植物のバイオマスとしての利活用(2-D-11-2)、水稻の栽培法の違いによる水環境/生物相に及ぼす影響(2-D-11-3)、沈水植物群落の再生過程における水質/動植物プランクトンに及ぼす影響(2-D-11-4)、沈水植物植栽システムにおける大型水生動物(巻貝類、二枚貝類、魚類)の浄化能、植物成長特性に及ぼす影響(2-D-12-1)に関するものであった。

統計的処理による水質の水性生態系への影響の評価については、克服すべき課題も多いものの、今後とも発展が期待される研究分野である。また、生物指標と水質特性の関連を明らかにするための研究では、上下流の連続性の関係を今後どのように明確化して行くかが課題であるが、その発展が望まれる研究である。また、水稻栽培における「冬期湛水」の効果を把握しようとする研究では、収量の低下が今後解決すべき課題であるが、土壌細菌数が増加するなど有益な面が確認され、今後の研究が期待される。沈水植物を用いた水質浄化に関連した研究発表は3件と多く、その関心の大きさが伺える。人件費の安価な発展途上国においてはWetlandによる水質浄化についても、植物の刈り取りによる栄養塩除去が成立する場合があるが、日本においてはこの点がネックであり、従来からの課題である。また刈り取った収穫物の有価物への変換も同様である。これらの点に関する研究の発展を今後ぜひ期待したい。

(山口大学大学院・理工学研究科 今井 剛)